

### 3.11 メモリアルネットワーク・学びあい交流プロジェクト

#### 企画シンポジウム「広島に学ぶ『伝承者を育てる』」

日時 2019年11月30日(土) 10:00~12:30

場所 東北大学災害科学国際研究所 1階多目的ホール

#### 開会

【司会(山縣嘉恵)】 企画シンポジウム「広島に学ぶ『伝承者を育てる』」、これより開会となります。本日司会を務めさせていただきます3.11メモリアルネットワーク会員の山縣嘉恵と申します。東松島市野蒜からやってまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。開会挨拶、3.11メモリアルネットワーク共同代表、武田真一より申し上げます。



#### 開会挨拶

武田 真一 (3.11メモリアルネットワーク共同代表)

皆さん、おはようございます。3.11メモリアルネットワークの共同代表を務めております武田です。よろしくお願いいたします。本日はこの寒い中、年末に向けていろいろ用事がある中、ご都合をつけていただきまして、こんな多数の方々にご参加いただきまして誠にありがとうございました。



今日のシンポジウムは3.11メモリアルネットワークと東北大学災害科学国際研究所が共催する形で開くものであります。ネットワークについてはお手元のパンフレットをご覧ください。このパンフレットは先日できたばかりの出来たてホヤホヤですが、東日本大震災の被災の伝承活動、復興の伝承活動に取り組んでいる岩手、宮城、福島、3県の団体、個人、語り部の皆さんが手を携えてつながり合って震災の記録、記憶、その後のあの日の出来事、あの日からの出来事をきちんと永続的に未来に向けてつないでいこうということで、ちょうど2年前に発足した組織です。民間の連携組織なわけですが、願いとしては、目指すものが、災害で命が失われない社会、被災後に被災者や被災地域の苦難を軽減して再生に向かえるような社会、その実現にわれわれは貢献していこうではないかという目標を立ててやっております。

8年9カ月がたとうとしています、被災地の様子も変わる中で、この出来事をどうい

うふうに伝え継いでいくかが被災地の大きなテーマになっております。それから、体験者の高齢化、さらに震災を知らない世代がどんどん増える中でその担い手をどうやって育てていったらいいのだろうというのが、やはりわれわれのネットワークにとっても大きなテーマになっています。

本日は広島から被爆体験の伝承講話をされている戸野さんをお招きして、70年以上の長きにわたって被爆の経験、平和への願いを発信し続けている広島の取り組み、その取り組みの原動力、その思想というものをわれわれは受け継いでいこうではないかということで、学ばせていただこうと思っています。戸野さん、本日は遠方よりお越しいただきまして、ありがとうございました。

戸野さんのお話を受けた中で、今度は地元の伝承活動、学ぶ活動に努めていらっしゃる3人の報告を頂きながら伝承の担い手を育てるためにどんな努力をわれわれはしていったらいいのだろうということを討論してまいりたいと思います。また、3.11メモリアルネットワークに対するご理解とご協力も、またこの場でお呼びかけするような場と心得ております。12時半まで少し長丁場となりますが、最後までぜひお付き合いください。重ねて今日は大勢の参加、ありがとうございました（拍手）。

【司会（山縣）】 ありがとうございます。続きまして、報告、『被爆体験伝承者』及び『被爆体験証言者』養成研修事業に参加して、東北大学災害科学国際研究所准教授、3.11メモリアルネットワークでもアドバイザーとしてお世話になっております佐藤翔輔先生にお願いいたします。

#### 報告 「被爆体験伝承者」及び「被爆体験証言者」養成研修事業に参加して

佐藤 翔輔 氏（東北大学災害科学国際研究所 准教授/3.11メモリアルネットワークアドバイザー）

皆さん、おはようございます。この後戸野さんがメインをお話しされるわけですが、そもそも戸野さんがどうやってここまでできたのかという経緯について、少し私の方からお話しさせていただきたいと思っております。

今日は先ほど武田代表からお話しされたように、3.11メモリアルネットワーク主催の行事でございます。この中には会員の方もそうでない方もいらっしゃると思いますが、活動は大きく3本だと伺っております。今回被害の多かった岩手、宮城、福島をつなごうという話と、次世代の育成を考えるとということ、そして、今日の趣旨であるのですが、会員さん相互で自主的にいろいろな意味のある有意義な企画をされており、主なものとしましては、学びあい交流プロジェクト、看板を設置する伝承看板プロジェクト、伝承シンポジウムも毎年開催されていますが、そういったプロジェクトがいろいろあるのです。そのうちのみんなで互いに学び合いましょ



という趣旨の学びあい交流会の主催のイベントとなっています。

今日は先ほど武田さんが言ってくれたように、これからどんどん時間が進行する中で人手の確保、特に若い方、次世代が大切だろうという趣旨で開催されています。前半が戸野さんのお話、後半が東北でのお話です。

なぜ、今回広島の戸野さんをお呼びしたかと言いますと、学びあい交流会の中で、「やっぱり広島の話を知りたい」という話がフツフツと上がってきていたのです。たまたま私が広島に今3年ほど通っていきまして、「被爆体験伝承者」「被爆体験証言者」養成研修事業に参加をしています。その参加をとおして、実際どんなことをやっているのかを皆さんに共有したくて、今日、前座としてお話をさせていただきます。

研修事業は広島市市民局国際平和推進部の平和推進課という部局でご担当されています。趣旨は被爆された方がかなり高齢で、直接語り継ぐことができる方が減少しているのも、被爆していない方でもきちんと伝えることができるようになるとうことなのです。

ここで注目していただきたいのは、「被爆体験伝承者」さんという言葉と、「被爆体験証言者」さん、二つの言葉が分かれているというのがポイントになります。

実際に広島で被爆を体験された方がいるわけですが、その一部の方がそのときのことをお話する証言者として活動されています。そして体験されていない方が今たくさんいらっしゃるわけですが、この中でその体験を伝える活動をしたいという方が伝承者になるということで、研修に参加します。そして広島市も研修しますし、この証言者の方、実際に体験された方から研修を受けるというのが、証言者と伝承者の位置付けになります。

その研修は、証言者コースと伝承者コースの二つに分かれています。証言者は2年が基本です。伝承者は3年以上です。3年で卒業できる方とそうでない方がいらっしゃると伺っています。最初の1年目は同じことをされるそうです。

まずは証言者による体験の聴講、証言者も他の体験者がどう話されているのかも伺うということになります。あとは、話法技術、どうしゃべればいいのかというしゃべり方の講習もされます。あとは座学ということでタイトルが「被爆の実相」というかっこいいタイトルになっているのですが、被爆に対する正しい知識を勉強しようというのが1年目になっているのです。

2年目からはもう体験した方は原稿を書いていただいて練習をしていただくということになりますけれども、体験していない方、伝承者には2年目が実は大きな割合を占めています。証言者グループミーティングを月1回やります。証言者の話をたくさん聞いて、この方のお話を受け継ぎたいという方を決めるのです。それをマッチングと言います。1人に対して複数の未経験者の方が付く。それを証言者グループと言います。その証言者グループの中で、毎月月1回ミーティングして、その人の体験を生き移すようなことをするのです。それが2年目にとっても大事なことになります。後半からその方のお話を踏まえて原稿を書いて3年目に実習して卒業するという流れになっています。

終わった方については広島平和文化センターの委嘱を受けて、平和資料館等で講話をされたり、今日の戸野さんみたいに国立の広島原爆死亡者追悼者平和記念館で、この事業として派遣するような方として活動される。こういったような経過をたどります。

実際の体験された方からお話を聞くのは、多分1回の講習が3日間なのですが、15名ぐ

らいの方からお話を聞きます。なるべく多くの方を聞いて、どの方のお話を受け継ぎたいかを決めてもらうのですね。

あとは、やはり正しい知識が大事です。被爆のこと、要は原爆がどうだったのかなど。この後、戸野さんがきちんとお話しされますが、きちんとそういった正しい知識を大学の先生や資料館の学芸員から勉強するということになります。

そして人前でしゃべることをしたことがない方が大変多いので、どうしゃべったらいいかという発声の方法を、地元のアナウンサーさんが講習されます。

そして、先ほど申し上げましたが、マッチングをするわけです。たくさんの方のお話を聞いて、3人候補を書かれるそうです。この人の話を受け継ぎたい志望理由まで書くのです。これを踏まえて、証言者と市役所の人で決めて、この人をこのグループにしましょうかという相談をして、決定されるという流れになります。

マッチングしたあとのグループミーティングですが、やり方は証言者次第です。決まっていけないのです。月1回必ず集まってもらって、やり方、内容というのは基本的には証言者のご意思だったり、そのグループに参加する幹事の方たちが決めます。あるグループの方のメニューを見ると、一人の証言者に2~10名ぐらいの伝承者候補が付きます。やり方は基本的にはグループ次第、月1回やるということです。

どんなことをやるのかというと、もちろん1回証言を聞いているわけですがけれども、もう1回お話ししていただいて、改めて質問がないかということだったり、あと、この後、戸野さんの写真にも出てきますけれども、実際に外に出て、ここでこういうことがあったのだよみたいなフィールドワークもやります。それを経て、その方の体験をなるべくそのまま生き移すことを頑張るのがこのグループミーティングです。

3年通っている中で、実際に活動されている証言者と伝承者と、あと広島市市役所の方にインタビュー調査をさせていただきました。今日の後援いただいているサーベイリサーチセンターさんと調査をご一緒しております。その事業で分かったことというのがありますので、今日は共有させていただきたいと思います。

先ほど申し上げた研修のカリキュラムがありますので、これについては証言者も伝承者も大変満足されておりました。高い評価をされておりました。この研修方法はいいよねという声が多くあるということです。

高い評価が得られていることが主に三つありました。一つは、これは全員の方がおっしゃるのですが、被爆の実相というのをきちんと勉強できるのが良いということでした。私は広島の方はすごく詳しいのだと思っていました。多分小学校、中学校でいろいろな教育を受けているのだろうなと思っていたのですが、実は先ほどの例でお示しした方たちの年齢はあまり小学校、中学校で教育してくれなかったらしいのです。ある種隠されていた部分もあるようなのです。ですので、元々知らなかったということで、きちんと勉強できた。しかも今何十年以上たっていますが、やはり新たな事実みたいなものも見つかっていくので、更新した最新の情報が学べるのも良いとおっしゃっていました。これは多分東日本大震災でも同じかなと思います。

2番目は、やはりグループミーティングが良い。1年間かけて月1回ゆっくりじっくりやるのが良いということです。実は証言者の語り以外のことが分かるのが良いのです。お人柄、背景、それ以外にその方がどういう生き立ちだったのかとか、その後どういう体験を

したのかというところまで、お付き合いしていくと分かるということで、これが分かる、その方のお気持ちになってしゃべれるということなので、こういった密接な時間というのが大事だということです。原稿を書くにあたって、それを真似するわけにいかないわけですね。やはり自分の講話というのを作らないといけないので、それがグループミーティングの礎となってきちんと書けるということでした。

あと、原稿や講話を上げるわけですが、それはその市役所の方ですとか、当人、受け継いだ元の方がチェックしてくれるので、そこで、ここは事実と違うよとか、こんなことを伝えてほしいといったやり取りができるのが良いということで、この研修方法そのものに対してはとても高い評価が得られていました。

そんな研修方法を経て、今日は戸野さんに来ていただいているわけですが、今回は、被爆体験伝承者等派遣事業を活用させていただきました。閑上の記憶さんでもこの事業を活用されたと伺っています。国立の伝承資料館の事業になっていまして、何と、今日はメモリアルネットワークや東北大学からは全くお金を出さずに戸野さんに来ていただいている。実は無料で全国に派遣いただいているということで、本当にありがとうございます。

では、今日なぜ開催するのかということの趣旨を改めて申し上げたいと思います。今見いただいている図は (ppt#21)、河北新報の記事を全部読んで、記事の中に出ている語り部の年齢を調べたものです。お話しされている方は何歳なのかということです。黒いのは、2019年、今年4月時点でのその方たちの年齢です。厳密にいうと、年齢を書いていない方もいるので、推定も若干含まれるのですが、こんな方たちです。東日本大震災がすごいと思うのは、メモリアルネットワークの例の若者トークの事業が多分影響していると思うのですが、10代、20代の若い方がいるのです。これは他の、中越や神戸では見られない現象です。ただ、私のような30代の人間や40代に少し谷間があるぞということで、ここは課題です。二つの山があります。

ここでお見せしたいものはそこではなくて、白いバーのところですが、白いバーはその方たちが震災当時何歳だったのかということなのですが、今8~9年たっているのに、白いバーと黒いバーが今右にシフトしているわけです。大変残念なのは、もう亡くなった方もいるというのもポイントかなと思います。つまり、冒頭で武田代表がおっしゃったこれから大変になってくるよというのは、数字でも表れてきているということになります。

そういった背景もあって、ある実験をやってみました。今日はその紹介をさせていただきたいと思います。ご存じの方はおられるかと思いますが、左上の写真 (ppt#22) の真ん中にいる女性は石巻市雄勝町で被災した佐藤麻紀さんという女性で、語り部活動をされている方です。学生の実験で、その方から話を聞いてもらっています。本人の話を聞く人もいれば、映像にそのときの様子をそのまま撮ってそれをご覧になる方もいらっしゃいます。あとは音声です。その映像から音声だけ抜き出したものを聞いてもらう。それを文字起こした文字だけ見てもらう。メモリアルネットワークの共同代表のもう一人の藤間さんがそこに写っていますが、弟子ということで、厳密には弟子ではないですが、まさに証言者と伝承者のような関係で、本人ではないけれども本人であるかのように話してもらう。この五つのパターンをしてもらいました。

それぞれ違う学生が10~20人ぐらいで聞くのですが、多分反応や影響が違うだろうなと思ったのです。何を見たかということまずは心拍数です。ドキドキが違うのではないかと。

あとは心の変化。多分前後でだいぶ違ってくるのではないかと。私が一番注目したのは、どこまで覚えているのかなというのを測りました。今日は時間がないので、どれだけ覚えていたかという記憶の部分だけ紹介します。

「先ほど佐藤麻紀さんが話したことを覚えているだけ書いてください」ということをやります。それを記憶の量に換算するある特殊な方法があります。本人からお話を聞いた人、藤間さんからお話を聞いた人、音声だけを聞いた人、映像を見た人、文字だけを読んだ人ということで、それぞれ10人から20人ぐらいいるわけですけれども、直後の記憶に差が出ます。皆さん、30秒考えてください。どれが一番覚えていたのでしょうか。

では、挙手をしていただきたいと思います。それぞれ聞いていきますね。本人が一番覚えていたと予想された方、手を挙げてください。ありがとうございます。いや、藤間さんの話が良かったという人、手を挙げてください。ありがとうございます。音だけが良いのではないかという人、手を挙げてください。ありがとうございます。映像が良かった。ありがとうございます。文字が良かった。ありがとうございます。では今から正解を出します。

音声が一番なのです。後で解釈してみますと、音声なので目の前の人がない、映像がないということで、情報が限定されるのですね。絵の情報が無いのでその分、音に集中するということになります。よく、朗読で目を閉じてくださいというのがありますね。あれと同じことをされているということになります。文字が一番最悪でして、多分みんなすっ飛ばして読んでいると思うのですね。きちんと読んでいないというのがあると思います。直後は音声覚えていたのですが、統計的な検定をすると、実はあまり差がないということになったのですね。差はないけれども音声が1位でしたというのは、直後の話です。

もう一つ、聞いてもらった人に抜き打ちテストをしました。8カ月後にメールを送って、あの話をどれぐらい覚えていますか、謝金を出すので書いてくださいということをやったわけです。では8カ月後、どれを聞いた人がきちんと覚えていたのでしょうか。今度は5秒です。5秒考えてください。

8カ月後は、本人からが1位なのです。長期的な記憶の部分については体験したご本人、広島の場合だと、証言者から聞くのが1番残るということになります。ただ、この証言者の方は佐藤麻紀さんに限らず、いつかは比較的若い人よりも早く亡くなる可能性が高いです。大事なものは第2位なのです。藤間さんは実は8カ月後の成績は2位なのです。ですので、体験していない人でも実際の人から聞くということがどれだけ大事かということになります。藤間さんは佐藤麻紀さんと語り部の活動に同行していますので、多分食事やプライベートなこともお話しされる。佐藤麻紀さんの背景もご存じなわけですね。そういった方がお話しされることがとても大事なことだということが分かります。

ですので、そういった意味があるということで、やはり広島に勉強した方がいいなと思って、文化センターに相談して、今回は戸野さんに来ていただいたということになります。東北でもそういった体験していない人、体験したけれども、あまり覚えていない人みたいな人に知識を移転していく活動が徐々に行われ始めてきているので、私が知り得る活動について今日はお集まりいただいてぜひ共有していただこうと思います。12時半までの時間になりますけれども、今日はお付き合いただければと思います。私からの報告は以上です、ご清聴ありがとうございました。

【司会（山縣）】 佐藤翔輔先生、ありがとうございました。大変興味深くお聞きさせていただきました。続きまして、被爆体験伝承講話、戸野弘幸様から、よろしく願いいたします。

## 被爆体験伝承講話

戸野 弘幸 氏

皆さん、こんにちは。ただ今紹介をいただきました広島から参りました戸野弘幸です。よろしく願いいたします（拍手）。今、佐藤先生の方からいろいろ広島の取り組みの話を皆さん聞かれたと思いますが、私はものすごいプレッシャーを受けた感じがします。



被爆体験伝承講話と被爆体験証言者の二つが広島にはあります。証言者と言われる方は 74 年前に実際に原爆に遭ったときにその場にいた人です。伝承者というのは証言者から話を聞いた人なので、基本的にはそのときその場にいなかった人です。私はその場にいなかった、生まれていなかったの、細川浩司さんの話をさせていただくことになっています。多い方では 6 人ぐらいの方をやっていらっしゃる方もあるし、日本語もやるし英語もやる、多才な方がいらっしゃるのですけれども、私は日本語で細川浩司さん一人をやっていきます。

細川浩司さんは現在 91 歳、ご存命なのですね。彼は 17 歳のときにもう働いているのです。働いて職場で被爆しているということで、親に手を引かれて逃げたのではなくて、自分の意思で怪我を治そうとし、あるいは逃げて、火のないところに逃げたのです。年齢的に見て、実際の方でも今 84 歳で、その方がきちんと皆さんの前で 1 時間しゃべれるかというと、結構難しいのです。女性の方は多いですけども、男性の八十幾つというと、少しネクタイ締めて出て 1 時間しゃべると、「椅子がないですか」というようなことを言うような年齢になってしまうのですね。

男性がだんだん少なくなっているのですが、細川浩司さんは 91 歳で、奥さんは亡くなられたのですが、今のところまだ元気です。この間、ローマ法王が来られたときに出て話をすることになっていたらしいのですが、直前に急に声が出なくなって替わりの方が出ていました。そういう形でいろいろ活動をまだ続けていらっしゃいます。この方は 17 歳で被爆したから証言者です。

証言者の方で当時 10 歳未満だった方はまだご存命の方が多いのだけれども、親に手を引かれて逃げたので、明確に覚えていない部分が多いのですね。けれども、17 歳だったら自分の意思であちこち逃げ回って、それで生き残ったということですので、年上の人の方の話を継いであげた方がいいと個人的に思ったのです。



この細川さんはもう 90 歳を超えているので、自分のことを絶滅危惧種と言われているのですね。「間もなく死にますから誰か私のことを引き継いで言ってください」という、そういう証言者の皆さんの言葉が今の傳承者のスタートです。

(以下、証言者の体験に関する話、中略)

以上です。どうも長いことご清聴いただきましてありがとうございます。

【司会(山縣)】 戸野弘幸さん、ありがとうございました。それではここで少々休憩を取りたいと思います。11 時 30 分の開始でよろしく願いいたします。

### 総合討論

コーディネーター：黒澤 健一(まなびあい交流プロジェクト担当)

登壇者：菅原 定志 氏(気仙沼市立階上中学校校長)

吉田 美穂 氏(宮城県震災復興・企画部震災復興推進課 主査)

三浦 美咲 氏(宮城教育大学 3 年生)

【司会(山縣)】 まなびあい交流プロジェクト担当の好きな食べ物は何でしょう。黒澤健一さんです。どうぞよろしく願いいたします(拍手)。



【黒澤】 皆さん、こんにちは。コーディネーター役、進行役の黒澤健一です。皆さん、よろしくお願いします。今日は素晴らしい方々に来ていただいていますので、順次お話を聞いていきたいと思いますが、皆さん、緊張していませんか。大丈夫ですか。今日は大ベテランの菅原さんから発表していただきますので、大丈夫ですからね。よろしくお願いします。

では、一人ずつ映像を使いながら話をしていただきたいと思います。では、最初に、菅原さん、よろしくお願いします。

## 「階上中学校の『伝承』活動」

菅原 定志氏（気仙沼市立階上中学校校長）



皆さん、こんにちは。気仙沼市立階上中学校の校長をしております菅原定志と申します。私の方からは本校で行っている伝承活動と私と生徒がやっている伝承活動の二本立てでお話しさせていただきます。私は仙台の学校に最初に赴任しまして、地元が気仙沼なもので、気仙沼に帰ってきました。大和町立宮床中学校に勤務していたときに東日本大震災に遭いました。今、私が勤めている階上中学は全校生徒が120名です。震災のときは180名ぐらいいた学校でした。

この写真は（ppt#3）震災直後の階上地区の様子です。階上地域は気仙沼の中でも一番犠牲者が多かったところ。残念ながら、本校でも3名の生徒の尊い命が失われています。

本校では平成17年からずっと防災学習をやってきました。先輩の先生方がずっとやられてきました。大きな宮城県沖の地震があったこと、スマトラの大津波があったことが背景にあります。私が赴任した平成29年度からはこれまでやってきた体験的な学習だけではなく、探究的な学習をしていかなくてはならない。つまり、体験的な学習というのは緊急時に自分の命を守るためにはどうしたらいいかという学習だと思うのです。それだけではなく、防災に対して深く学ぶことが必要ではないかなということ、探究的な学習を取り入れております。

これからの防災学習というのは、特に被災地の学校としての使命だと私は思っています。震災の記憶がない知らない生徒がこれからどんどん入ってきます。ですから、その教訓や学びを伝承していくことが絶対に必要になってくるのだろうなという思いが私にあります。

それから、東日本大震災をいつまでも傷としてというか、負の遺産として置いておくのでは、これから生きていく子どもたちはとてもかわいそうだとすることで、東日本大震災を正の財産にできないだろうか。つまり、学習の教材として活用したり、震災の伝承が重要なのだということを伝えるものとして使っていきたいと考えています。そして、伝承することがきっと命を守るきっかけになるのではないかなと私は考えています。

## #6

今年度本校で行っている防災学習の探求の学習の部分は「伝承」ということでやっております。20名の地域の皆さんから東日本大震災についてお話をいただきました。そのお話の中から気づいたこと、学んだこと、教訓をまとめてどのように伝承していったらいいかということ、19のチームに分かれて考えております。

知らない人たちに伝えるためにはどうしたらいいかと考えたときに、伝承の対象者をどうするか。つまり、小学生と幼稚園児、小学校の高学年と幼稚園児ではやはり違うと思います。方法、内容、といったことを本校では部活動ごとに考えています。部活動ごとにし

ている理由は、異年齢集団で活動できること、それから、毎日同じ活動をしているので、コミュニケーションが取りやすいということからです。

東北大の佐藤翔輔先生には平成 29 年度に私が赴任したときからお願いして、防災学習のアドバイザーとして直接指導していただいています。気仙沼の地域の子が大学の先生に直接お話をしていただくなんていうのは多分うちの学校ぐらいしかやっていないことだと思っています。子どもたちも最初は緊張しているのです。今は完璧に「翔輔先生」という感じになっていますので、本当にそこは幸せだと思っています。

実は 12 月 1 日、日曜日なのですが、その防災学習の発表会があります。リハーサルを見てきたのですが、寸劇で伝えるチーム、紙芝居を使っているチーム、朗読劇をするチームといろいろあります。明日 1 時 10 分から本校の体育館で行います。翔輔先生に来ていただいて、最後の講評を頂くことになっていますので、もしお時間がありましたら、階上までおいでいただければと思います。どうぞよろしくお願ひします。

ここからは私と有志の生徒で行っている伝承活動についてお話をします。今年の 3 月に東日本大震災遺構・伝承館が気仙沼にオープンしました。その館内ガイドをしたいとずっと思っていて、まちづくり協議会の「語り部」部会とかの協力を頂きながら、震災遺構の館長と懇意にしており、コラボ企画で始めました。

今は 22 名が参加しています。これは実は増殖してしまっていて、「次はこれをやるよ」と言うのと、「校長先生、僕、入っていいですか」と言うので、30 に近づいております。学校の教育活動から切り離れたボランティア活動、簡単に言えば、部活動みたいなものです。ですから、活動は土日と休みの日、特別なことがあれば放課後にやっています。

これを始めた理由は、自分のふるさと階上で起こった事実を理解してほしい。そして、目を向けてほしいということ、それから、直接体験しなくても、伝承できるということを実証したいと私は思っています。それから、中学生というところがキーポイントだと思っています。大人ではない中学生が伝承することの意義というのが多分あるのではないかとということで始めました。

最初は伝承館の方から案内の原稿をもらったのですが、子どもたちがすごいなと思ったのは、自分の言葉でガイドしたいということではいっぱい書くのですね。ただもらった原稿どおり話す子はいません。その中には学校で学んだこととか、家族から聞いたこととか、そういうのを盛り込んでお話をしています。中には家を流された子もいるので、その中で貴重に残ったものを、「実は僕の家は流されたのだけど、これだけ残っているのです」なんて持ってきて見せている子もいます。

これまで JICA や ACCU というような外国の方を中心にガイドしてきました。先日は初めて同年齢の岩沼西中学校の生徒 200 名ぐらいをガイドしました。これは本当に貴重な経験だったと思っています。一番の狙いはここだったのです。同年齢の人たちに伝えたいと思っていました。

それから、なんと先週の日曜日に安倍総理が来るということで、復興庁から「中学生のガイドをやってくれ」と言われました。「今日、緊張していますか」と言われましたが、全然今日は緊張していません。先週の方があれだけ緊張しました。私は一切しゃべっていないのですが、汗がだらだら流れてきました。

というようなことをやっておりました。まだ始まったばかりで、これからどうなるか分

からないですが、続けていきたいと思えますし、中学校3年生の子は中学校を卒業してもやりたいということだったので、組織を私の手元から離して「伝承館」の中に入れて、今後は高校進学後も「伝承館」からガイドの依頼が来るというような組織づくりをしています。私からは以上です（拍手）。

【黒澤】 ありがとうございます。先生、熱いですね。ものすごい熱いお話を頂きました。細かいところは後ほどもう一回お話を頂きます。

続いて、吉田さんの方からお願いいたします。

### 「東日本大震災からの復旧・復興過程で得られた職員の経験を伝える ～次世代の職員に伝え、今後の判断材料のひとつに～」

吉田 美穂 氏（宮城県震災復興・企画部 震災復興推進課 主査）

皆さん、こんにちは。宮城県震災復興推進課の吉田と申します。本日はこのような機会をいただき、ありがとうございます。私の所属しております震災復興推進課は震災後に新しく設置された課で、国や他県との復興に関する連絡調整ですとか、県外に避難されている方々への支援、それから、復興に関する広報など、さまざまな業務を担当しています。本日は宮城県庁内の震災伝承取り組みに



ついて、スタートさせたばかりですけれども、ご紹介をさせていただきたいと思えます。この取り組みをスタートさせるに当たっては、今村先生、佐藤翔輔先生をはじめ、兵庫県、新潟県の皆さまからたくさんのご指導を頂きました。ありがとうございました。

震災のときは入庁3年目で、何をしていたか全く分かりませんでした。また、他の部署でどういった災害対応をしていたとかといったことも全然分かりませんでした。現在、震災復興推進課に来まして、この取り組みを通じて当時の震災対応について日々勉強しているところです。

今の宮城県では、震災後に採用された職員が3割を超えている状況にあります。これは当時災害対応した職員が年々退職していることでもありまして、当時の状況をいかに伝えていくかといったところに問題を抱えております。このような中、次の世代の職員に伝えていくために復興10年の総括検証をスタートさせているところです。本格実施までに、多くのご指導をいただきながら試行を重ねまして、今年8月22日に第1回目の職員インタビューを実施したところです。

取り組みの概要としては、次の世代の職員に伝えていくということを目的としまして、退職者を含む職員への80テーマのグループインタビューを実施しております。外部アドバイザーには今村先生、佐藤翔輔先生にご就任をいただいております。

、震災対応未経験の職員、それから、現時点の担当職員が同席、聴講することで、その場で直接生の声を聞いて持ち帰っていただくといった取り組みにしております。この取り

組みを通じまして報告書等の作成を予定しており、県職員の研修の場での活用はもちろんですが、これまでご支援をいただきました皆さまへの配布ですとか、県のホームページへの掲載など、幅広く情報発信をしていきたいと思っております。実際のインタビューの様子の写真です (ppt#6)。写真だと分かりにくいので、動画を作成いたしましたので、ご覧ください。

**\*\*\*動画の上映\*\*\***

インタビューを職員に打診をしたときには「もう忘れてしまったよ」と言う職員もいますが、いざ、インタビューが始まってみますと、業務をともにした同士が、当時のことを思い出しながら、自分の言葉で語っているところに立ち会うことで、その表情、表現から記録誌などでは読み取ることが難しい当時の状況を想像することができているかなと思います。

インタビューに参加した若手の職員からは、当時、本庁舎にいた人間としては、地方事務所、現場で起きていたことを直接聞く機会もなく、また、聞きにくい内容だったので、全ての情報が役に立ち、後世に残していくべきものと感じたといった感想も得られています。

令和3年度末までに延べ1200の職員にインタビューを行い、報告書の印刷・製本を行う予定としております。今後も皆さまからご指導、ご助言をいただきながら、この取り組みを継続していきたいと思っております。よろしく願いいたします。以上です (拍手)。

**【黒澤】** 1200人に聞き取っていくということで、今年度は270人ぐらい聞かれたのですか。

**【吉田】** 今年度は、今現在41回で、約170人の方々に話を聞いていまして、年度末までに270人です。

**【黒澤】** 1200人というものすごい聞き取りの数なので、また後で細かく聞きたいと思えます。ありがとうございます。

それでは、続いて、三浦さんの方からよろしく願いします。

**「震災に向き合い、伝えるために一被災地から教員目指す学生として」**

**三浦 美咲 氏 (宮城教育大学 311ゼミナール 3年)**

私は現在、宮城教育大学の3年生です。出身は宮城県の南三陸町で、震災当時は南三陸町立名足小学校の6年生でした。そこで私は学校避難を経験しました。自宅は津波によって全壊し、母の実家に家族全員で避難しました。



母の実家は建設業を営んでいるのですが、その社長でもある祖父が津波の犠牲となってしまいました。祖父の顔を見たり、火葬に立ち会ったりすることはできなかったのですが、祖父が亡くなったことを知らされ、ブルーシートで隠された祖父を見たとき、何とも言えない悔しさと悲しみがこみ上げてきて、なぜ祖父は死なねばならなかったのか。こうしたことが二度と起こらないようにしたい。自分の命を自分で守れるような防災教育をしたいと思いました。そこから私は教師を目指すようになりました。現在は宮城教育大学の防災教育研修機構の311ゼミナールで仲間と宮教生に発信する震災について考え、活動しています。

学校避難について少しお話ししたいと思います。震災の起きた当時はちょうど6時間目の終わりごろでした。地震発生後、避難訓練のとおり第一避難場所である校舎裏の職員駐車場に避難しました。その後、海底が見えるほどの引き潮を見た教員やPTA会長、校長先生の判断によってさらに高い裏山へ避難しました。しかし、その避難先でも水しぶきを感じたため、より奥の方へ避難しました。さらに地域住民からより高い場所を教えもらい、避難しました。第一避難場所から数えて計4度場所をさらに高台へと変え、避難しました。当日は高台にある保育園で一夜を過ごしました。

次に私たちのゼミの活動についてご紹介します。「311ゼミナール」は今年から活動を始め、現在では30人以上のゼミ生が所属しています。東日本大震災をベースとして宮城教育大学の学生に向けて発信しなければならない震災とは何かを考えつつ、それぞれのテーマに沿って活動しています。大きく三つのグループに分かれており、現場の防災教育について調べる班、福島の放射線問題について調べる班、そして、ゼミ生の学校避難の体験を追体験し、検証する班に分かれています。

私はそのうち学校避難の体験を追体験し、検証する班に所属しています。以下、検証班と言わせていただきます。検証班ではゼミ生の学校避難の検証を通して子どもたちの命を守るために重要になるポイントとは何か。学校ではどのような事前準備や避難行動が求められるのかをまとめ、発信することを目的として活動しています。

私の他に石巻市門脇小学校で学校避難を体験したゼミ生がいます。門脇小学校では校長先生を中心に防災教育や保護者との協力に力を入れており、震災当時は日和山に避難し、学校にいた子どもたちは全員助かったという避難体験をしています。私と二人の学校避難の体験を検証するという活動を行っています。

今年の8月21日には名足小学校と門脇小学校でそれぞれ当時の校長先生とともに避難経路をゼミ生全員で歩き、当時の学校避難を追体験するという活動を行っています。また、当時の先生たちへのアンケート調査も行っています。現在はその現地視察とアンケート調査の結果を基に学校避難のポイントについて整理していく段階になっています。

最後にこれまでの活動、体験を通して考えたこと、感じていることを三つお話しします。まず自分自身はこれまでに震災について深く向き合ってくる機会がなかったということです。311 ゼミで活動するまで震災にきちっと向き合ってくる時間が今までなかったように思います。このため、311 ゼミでの活動における現地視察は他のゼミ生の追体験だけでなく、震災を経験した自分自身も当手を振り返る良い機会となりました。実際に避難経路を歩いてみたことで思い出されることも多くあり、8年が経過し、教職を目指す今だからこそ見えてくる当時の状況や考えなければならぬと思うことも多くありました。そういう意味でも今回の視察はとても意味のあることであり、当時に戻ったように自分が震災や防災と向き合う機会となったと思います。

次に震災に向き合いたい、防災について考えたいと思っても、それに踏み込む機会そのものが少ないということです。同じゼミ生の中にも今まで震災について深く関わり、向き合うことをしてこなかったが、311 ゼミの開始に伴い活動に参加しようという学生が多数いました。私を含め、震災について向き合いたくても、そういった機会に恵まれない。または踏み込むことができないと感じている人は多くいるのではないのでしょうか。震災が自分から遠いものという認識があり、これまでボランティアに参加したことがないということから、向き合うことに引け目を感じている人もいました。気になってはいるが、受動的になってしまい、自分から震災に向き合う機会を作ることができずにいるのではないかと思います。

こういった人たちがハードルを感じることなく、震災やその他の災害と向き合う機会を作るために、そこへ飛び込むための土台づくりが必要だと思います。そういった仕組みがどういうものであるかは、私は今の段階では分からないのですが、向き合いたい、気になるなど思っている人たちが躊躇することなく踏み込むことができるような、その前段階の仕組みが必要なのではないかと思います。

次に伝えていくことに被災体験は必要だろうかということについてお話しします。311 ゼミが始まったばかりのころ、ゼミ生の中で震災の経験や考えなどを共有する機会がありました。そこであるゼミ生が「私は海から離れたところに住んでいたから震災のことはあまり身近ではない。被災したわけでもない。経験のない私に震災について伝える資格があるのか。被災者に対して引け目を感じる」という発言がありました。伝承することに経験は必要でしょうか。私は経験がなくとも伝承はできると思います。それだけでなく、経験していないからこそ伝えられることがあるのだと思います。

私がよく感じているのは、自分が話した経験や考えが相手にきちんと伝わっているのかということです。自分のことであり、かつ普通では考えられないような経験をしたため、伝えなければならない、二度と被害が起こらないようにしたいという思いは強いと思います。しかし、その強い思いという熱が相手に伝えることをじゃましていることもあるのだと思います。「何かすごい大変なことだったのだな」と片づけてしまうのではないかと思います。

「私はこうだった。二度とこんな思いはしてほしくないのだ」と語っても、それが相手から大きくかけ離れたものだとしたら、相手の中には入っていかないのだと思います。自分自身は正直語り部の話を聞くと、「そうか。大変だったのだな」と思って終わってしまうことがあります。また、自分もそういった語り方をしてしまう側面があると思います。

だからこそ経験がなくても伝承ができると思うのです。経験していないということは、それだけ伝える際には多くの情報を取り込み、考えた上で冷静な視点で物事を伝えることが可能になるのではないかと思います。

だからといって、経験した人が悪いというわけではなく、経験した立場からしか語れないこともあると思います。同じく経験していないからこそ伝えられることもあると思います。伝承に経験はいらないと思います。そういった立場や考え方、視点をうまく利用し、伝承に生かしていければよいのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました(拍手)。

【黒澤】 ありがとうございます。三浦さんは子どものとき、避難、移動するとき、皆さんと歩いていて、恐怖というものは感じましたか。

【三浦】 恐怖は感じましたが、あまりにも突然すぎて、感じている余裕がなかったというのも半分あると思います。

【黒澤】 周りの大人の人もそういう気持ちにならないように振る舞ってくれたというのがありますかね。

【三浦】 多分周りの大人もいっぱいいっぱいだったと思います。

【黒澤】 みんないっぱいいっぱいの中でそういう恐怖感を持つ間もなく避難をしていったということですかね。

【三浦】 はい。

【黒澤】 ありがとうございます。では、今3人の方にいろいろな発表をしていただきましたが、ちょっと掘り下げていきたいと思います。また菅原先生の方に戻っていきますが、菅原先生、いろいろな活動を学校内で行われている。翔輔先生にも来ていただいてという中で、子どもたちの心の変化、行動の変化というのはその活動を通して感じますか。

【菅原】 他の学校から転勤してきた先生の第一印象というか、その話は「階上の子たちは防災に対するポテンシャルが高いね」という感想を頂けます。それから、自分たちは防災学習をしなければならないとか。何て言うのでしょうか。先輩方からやってきたのを引き継いでいっているという三大伝統というものの一つになっているので、そういう意味では自覚もあるし、そして、自分たちが先頭を切って行かなければいけないのだという使命感も持っているのではないかとはいっています。

【黒澤】 先生から見て、活動の中で生徒さんから出た言葉で、印象的な言葉というのがありますか。

【菅原】 今年の宮城県の弁論大会で優秀賞を取った子は「1000年先の今」ということで話しました。その中で出てきた言葉で、「なかったことにしない」。つまり、今はどんどんどんどん復興していますよね。壊れたところに土盛りをして、新しい



建物が建っていく。本当にあと5年、10年たったら町が全然変わってしまう。「なかったことにしない」というところを多分子どもたちの中では思い続けているのではないかと思います。

【黒澤】 なるほど。それと、アクティブにいろいろな活動を学校内、学校外でもされていますが、先生にとってこの8年半以上たった現在の中で一番今まで苦しかったことは何でしょうか。

【菅原】 先ほどお話ししたように、震災のとき、私は大和町の学校にいたので、地元の気仙沼にいなかったのです。当時は皆さんもご存じのように情報が入ってこない。ラジオだけだったという。そういった中で、ちょっと前までは気仙沼で働いていた私だったので、戻って何か手伝いをしたいという思いがずっとありました。でも、目の前には自分の今の学校の子どもたちがいる。特に教頭という立場だったので、帰れないですよ。

それをずっと思っていて、気仙沼に戻って、先生方に会ったときの一番最初の私は「ごめんなさい」から始まりました。「震災のときに何もできなくてごめんなさいね」と。それが今でも残っているし、多分それが今の原動力になっている気がします。

【黒澤】 ありがとうございます。本当に大変なときに地元にいられなかったジレンマ、本当に苦しいものがありましたね。ありがとうございます。

では、吉田さん、震災当時は入庁して何年目でしたか。

【吉田】 入庁3年目でした。

【黒澤】 今は一人の活動をされていますが、その当時はどういったことをされていた。

【吉田】 私は平成20年4月に宮城県庁に入庁しまして、そのときの所属が農林水産部の農業振興課におりまして、地震のときもそこにおりました。県庁の10階に執務室があるのですけれども、そちらで地震に遭いました。

【黒澤】 そのタイミングではどういったお仕事をされたのですか。

【吉田】 農業振興課ということで、農業の担い手の方を支援するような事業を担当していたのです。

【黒澤】 発災して、すごい庁内も混乱したと思うのですが、その当時、3年目ということで、どういった活動ができましたか。

【吉田】 本当に何をしていたか分からなくなりました。本来業務はもちろんストップになりますし、とって、何を私はしているのかといったところが本当に分からなかったなと思います。

【黒澤】 そういった中で、自分でできなかったという思いがある中、今、そして、次の庁内の新しく職員になる方のために聞き取りをしているという今の自分自身はやりがいを感じていますか。

【吉田】 そうですね。始まったばかりの取り組みですが、この取り組みを継続して、インタビュー1200人ということで、それが終わっても、庁内で語り合うような時間とか、そういったものが続いていて、災害が起きたときに私のように何をしていたか分からないというような状態にならないようにできたらいいなと思います。

【黒澤】 聞き取りしていた映像を見ましたが、結構自分の本当の気持ちを吐露すると思いますか、皆さん、出していますよね。自分の負の部分もしっかり皆さんお答えいただいていると思うのですが、担当として吉田さんがその負の心を170人受け入れて、今後1200人もその心を受け止めるというところで、結構心に重い負担になったりしませんか。大丈夫ですか。

【吉田】 そうですね。今年度第1回目は8月22日でしたけれども、その前からずっと試行はしてまして、その中で話を聞いたときに、その話がずっと頭から離れないといいますか。そうですね。そういったこともありますね。

【黒澤】 そのインタビューが終わったお話が家に帰っても頭をよぎるような感じだったりするということですね。その中、頑張っているという事です。今まで170人のお話を聞いて、一番印象に残ったエピソードとかはありますか。

【吉田】 その質問を頂くのかなと思って、これまでお話を聞いた方々の自分でメモをずっと取っているのですけれども、それをあらためて見返したのですけれども、選べないといえますか、それが正直な気持ちでして、すみません、考えてはきたのですけれども。

【黒澤】 やはり重い皆さんのお言葉一つ一つを選べというのは難しいですよね。菅原先生、今お話を聞いて、先生も校長先生としてやられている中でいろいろな話を聞くと思うのですが、吉田さんの気持ちとかはよく分かりますよね。

【菅原】 生の声を聞くというのはとてもすごく貴重な経験でもあるし、ある意味ストレスでもあるのだと思うのです。苦しいことをずっと聞くのも、それを受け止めなくてはいけないので、そういった中で1200人のお話を聞いて、それをまとめていこうとする仕事というのはなんてすてきなのだろうなと私は思って聞いていました。

【黒澤】 県が次の職員の方、もしくは次の災害があったときにしっかり対応していこうという本気の姿勢がこの聞き取りに感じます。ありがとうございます。

そして、三浦さん。三浦さんは今まで震災に向き合う場がなかったと。大学に入って、向き合う場所を得たという話でしたが、やはりそういうのに触れる機会というのは少なかったのですか。

【三浦】 私は少なかったですね。今まで中学校とかでも防災教育というのはあったのですが、自分の経験に向き合うというより、避難所運営訓練という避難所を実際に子どもたちだけで動かそうという訓練だったりとか、避難訓練もそうですが、そういった機会しかなくて、今まで自分をもう一回見つめ直すという機会はあまりなかったです。

【黒澤】 今、実際にゼミでいろいろな活動をする中で、あらためて自分が感じたことはありますか。

【三浦】 先ほどもお話しした中であつたのですが、経験のない方が震災について関わったり、伝えていこう、防災教育をしようということを考えることについて引け目を感じているという発言をゼミ生からもらって、そこに自分はすごく驚いたのですね。自分自身がこういった経験をしましたと話しても、それが相手には伝わり切っていないなと思っていたのです。だったら、客観的な視点で物事を語れる、経験ではなくて、向き合って伝えていきたいと思っている人はすごいなと自分の中では思っていたので、そういう引け目を感じているということに驚いて、でも、そんな関係なく伝えていく活動をしようよということが自分の中では一番考えが、こういう考えもあるのだなと思ったところでした。

【黒澤】 自分は経験して、当たり前のようにではないですけども、本当に真剣に取り組んでいきたいと。ゼミに入っても取り組んでいると。ただ、そのゼミで同じグループでやっている人たちに経験していない人がいたときに、そういった話を聞いたときに衝撃を受けたということですかね。

【三浦】 はい。

【黒澤】 でも、いろいろ活動する中で「いやいや、経験していないからこそ感じる部分、

語れる部分があるな」というのをすごく感じたということですか。

【三浦】 はい、そうです。

【黒澤】 なるほど。ありがとうございます。すごい皆さんの話は深い話なのですけれども、時間もあと5分ぐらいしかないので、最後のまとめの方に入っていきますが、皆さんが活動してきた。本当に仕事で活動であったり、実際の自分のライフワークの活動であったりはあると思うのですけれども、次の世代に犠牲を出さないための活動ということは皆さん共通していると思うのですが、その観点から皆さんがこれから目標、夢としてもっとこうしていきたい、こういう活動に取り組んでいきたいというのを、最後にお話を聞いて終わっていききたいと思うのですが、最後は三浦さんの方からお願いいたします。

【三浦】 私がこういった伝承という視点から、これからやっていきたいと思っていることは、まずゼミの活動をしっかりやるということと、自分が教員になって防災教育をやりたいということです。私がやりたいと思っている防災教育というのは、地域と密接に関わった防災教育で、私自身もコミュニティというか、つながりが強い地域で育ったので、海沿いだから津波が来るよということは地域からも言われていた。学校も結構結びつきが強くて、それによって私たちが安全に避難できたということもあると思うのですね。

ですから、そういう地域とのつながりを大事にした防災教育をしたいというのもありますし、都会とか、仙台もそうなのですが、隣に住んでいる人が誰かも分からないという状況で、どうすればみんなが助かるかと考えたときに、学校が始点になって防災を広げていければいいのではないかと考えていて、すぐに学校、地域と行くのは難しいと思うのですが、学校から子どもに、子どもから親に、親から地域にというつながりを持って広げていくような防災教育の取り組みができればいいと私は思っています。

【黒澤】 ありがとうございます。続いて、吉田さん。

【吉田】 私は、スケジュールがありますけれども、無事に進めていくことが目標です。この取り組みを通じて、災害が起きたときに何をしたいか分からないといった職員がいないようになればいいと思っています。

【黒澤】 言い残したことはありませんか。大丈夫ですか。

【吉田】 大丈夫です。この取り組みは令和3年度で終わっているのですけれども、終わっても、ここで記録したものをずっと研修などで活用していきたいと思っておりますし、広く情報発信をしていきたいですし、あとは職場の中で震災のときのことを自然に語り合えるような状況というか、そういった会というか、一回でもいいので、そういった時間が作れるようになるといいなと思っております。

【黒澤】 ありがとうございます。では、菅原先生。

【菅原】 気仙沼市は、震災直後は防災というものにすごく教育も向いていたのですが、時間とともに防災は少し追いやられている感が私はすごくあるのです。まずそれを打破しなければいけないということで、いろいろ教育委員会とも戦ったりもしているのですが、その戦いの理由はあと2年しかないからです。定年まであと2年なのです。だから、この2年間で私が今やっている活動を定着させたいというところが一つです。



それから、私も公務員なので、転勤というのが出てきます。多分3年階上にいるので、そろそろ危険なゾーンに入ってきているのです。他に行ってもこの活動をやりたいなと思っていたのです。他の学校でもできると思うのです。例えば震災遺構の伝承館がなくても、伝承活動というのは、その地域で被災しているので、できるはずなので、それをやっていきたいということと退職後もこの伝承の活動に関わるということで、ライフワークで楽しみながら子どもたちと一緒にやっていきたいと、語り部のじいちゃんと言われるような人になってみたいと思っています。以上です。

【黒澤】 ありがとうございます。本当に三者三様で、伝承に対する思い、信念というものを貫き通して継続していく力というのをすごく感じました。今日は本当にありがとうございました(拍手)。以上で、終了いたします。ありがとうございます。

【司会(山縣)】 ありがとうございます。もう一度皆さま大きな拍手をお願いいたします(拍手)。ありがとうございます。どうぞご着席くださいませ。

伝承ということで、「なかったことにしない」という弁論大会優秀賞の生徒さんの言葉が本当に胸に残りますけれども、戸野さんからもお話しいただいた細川さんの言葉の「隠していたのでも、語るのを拒んできたのでもなく、ただ忘れただけだった。時間が解決してくれませんでした」という言葉もすごく印象に残っています。伝承していく上で、そういった心のケアと申しますかね。心の部分というところもこれから考えて、これからだと思うので、もう少しそういったものを考えていただけるような仕組みというものも大切にしていだけたらなと思います。誰に向かって言っているかなという感じですがけれども、そういう世の中になってほしいなということです。県の方の取り組みも関わる方々が苦しくなったりすると大変ですし、戸野さんも50回会社をお休みになったということで、それに関わる方を守っていけるような仕組みになっていくと、より一層伝承者を育てるということにもつながっていくのではないかと思います。ありがとうございます。

それでは、閉会挨拶ということで、東北大学災害科学国際研究所所長、3.11 メモリアルネットワーク アドバイザーでも大変お世話になっております今村文彦先生からよろしくお願ひいたします。

## 閉会挨拶

今村 文彦（東北大学災害科学国際研究所 所長／3.11 メモリアルネットワーク アドバイザー）

本シンポジウムにご参加いただきまして誠にありがとうございます。最後にお礼の一言を述べさせていただきたいと思います。まずはこの 3.11 メモリアルネットワークまなびの会ということで、本日「広島にまなぶ」、そして、伝承を考えると、伝承者になるためにはということでご議論いただきました。本当に週末の今日は一番寒いぐらいなのですが、お越しいただきましてありがとうございます。この場において本当に当時の広島での苦悩、また、経験をいかに 70 年以上続けているのか。その一端を学ぶことができました。戸野さんにはあらためて御礼を申し上げたいと思います。



戦争、また、被爆体験、これは本当にわが国の大きなつらい経験でありますけれども、同時に自然災害においても同様な経験を持っています。まさに 3.11 にわれわれは何をすべきなのか。非常に考えさせていただく機会になったと思います。

一昨日なので、NHK で、大林宣彦さんが恐らく最後になるかもしれない映画に関して広島に行き、尾道なので、広島出身ではあるのですが、一時期被爆とか、戦争については離れていたようなので、最近また新たに戦争とはということで、自分自身で社会に何を残したいのか。これを考え抜きまして、映画を作ったということもちょうどお聞きして、重なったところです。

あらためてわれわれが伝承する意義、伝承することがなぜ必要なのかというところを今日考える機会だと思っておりますけれども、例えば自然災害においては繰り返されますよね。あのときの経験、あのときに起きたことが同じように起きているので、きちんと伝えれば必ずや防災・減災ができます。これが一つの出発点になると思います。

もう一つは、残念ながら、われわれは記憶が薄れてしまう動物ですね。これは必然的でありまして、脳自体が全て残さないと。短期記憶と長期記憶をわざわざ分けている。これは生き残る一つの手段だと聞いております。しかし、大切なところは、教訓等はちゃんと長期記憶に残して、われわれはいざというときにそれによって対応しなければいけないと思っています。そのために伝承というのが何を伝えるかということで必要かと思っております。

もう一つのこれも必然なので、世代が変わりますよね。そうすると、われわれが思い、われわれが考えても、それが伝わりとは限らない。そのための努力をすべきであると思っています。

最後は学びということなのですが、なぜわれわれは学ぶのか。これは人間として本当に欲求的なものがあるかと思うのですが、一つはやはり我々は常にバイアスというのでしょうか。偏見というのを持っています。生まれたときからいろいろな体験をし、いろいろな知識を得ているはずなのですが、それは限りがあり、実際に起きている状

況に対して対応できていないことがあります。この偏見を小さくさせなければいけない。ゼロにはできないと思うのですけれども、そのためには学ぶこと、また、学び合うことであるかと思えます。

まさに本日のこの場が黒澤さんの企画ですよね。こういうわれわれが持っていた今までの考え方を少し変えられて、また、一步進化し、発展する機会になったのではないかなと思っております。大学においてもまさに学ぶ場でありまして、皆さんとともにこういう機会をますます設けさせていただきたいと思えます。本日は週末にもかかわらず、多数の方にご参加いただきまして、あらためて御礼を申し上げます。ありがとうございました（拍手）。

【司会（山縣）】 今村先生、ありがとうございました。皆さま、今一度大きな拍手をお願いいたします（拍手）。感謝申し上げます。皆さま、ありがとうございました。

それでは、これをもちまして、プログラムを終了いたしますが、ここで事務局から事務連絡がございますので、そのまま皆さまお聞きくださいませ。

【事務局】 311 メモリアルネットワーク事務局の三浦と申します。4点事務局から事務連絡がございましたので、ご紹介させていただきます。まず今回の企画は、メモリアルネットワーク会員の皆さまがこういうことを学びたいということをプログラムとして昇華させたものになっています。会員の皆さま、ぜひこういうことを学びたいということがありましたら、事務局までご連絡いただければ、まなびあい交流プロジェクトの方で企画にしていきたいと思っておりますので、ぜひぜひ皆さまのためのネットワークです。積極的なご意見を頂ければと思っております。今回の運営に関しても本当に会員の皆さまが主体的にサポートくださりまして、皆さんで作っているプログラムになっています。

次回まなびあい交流プロジェクトは、チラシでは共有できていないのですけれども、三つの記念公園のうち岩手県は陸前高田に記念公園ができております。そちらを12月15日に視察に行くというプログラムがおおむねできておりまして、実際にこれから国が作る伝承施設がどういうものなのかというのを見ながら、周辺で民間で伝承活動をされている人たちがいるので、実際に陸前高田はどういう形でこれから震災の記録を伝えていくのかというところを見に行くプログラムになっております。12月15日に陸前高田です。

それから、チラシの方をお配りしてしました。まなびあい交流プロジェクトの他にも、若者たちがこれからどういう伝承をしていこうというところで、一つ12月22日になりますが、若者トークということで、若者の部会の方でのイベントが企画されています。こちらは配布している資料の中に入っていると思えます。

これから事務連絡をあと3点お伝えさせていただきます。一つ目がアンケートのご協力です。今回のプロジェクトの一部サポートを宮城県の補助金を活用して運営させていただいております。3.11 メモリアルネットワークの会員の皆さま対象のアンケートになりますので、ぜひアンケートのご協力をいただければと思えます。会場を出るところに机を置きましたので、そちらの上に最後に置いて戻っていただければと思えます。

それから、もう一つ、3.11 メモリアルネットワークの会員の皆さま向けに震災伝承の活動をサポートする助成金を今年度から開始させていただいております。今、絶賛公募中

なっております、申し込みの方がまだ初めてということで、なかなか浸透しておらず、申し込みの方が少ないという状況でしたので、12月2日まで申し込みを延長しております。今のタイミングで12月2日までというところはなかなか難しいかもしれないのですが、大口の150万円のコースと小口の50万円のコースがありまして、伝承の活動に比較的自由に使える助成金ですので、今のは民間のお金ですので、助成金になっておりますので、ぜひご活用いただければと思います。

それから、最後になりますが、311メモリアルネットワークの会員になりますと、先ほど紹介した若者のプロジェクトとか、今後のまなびあい交流プロジェクトの情報を随時発信させていただいております。個人会員は年会費で1000円になっておりますので、もしこの機会に会員になりたいという方がいらっしゃいましたら、この場でスムーズに申し込みます。私の方で手続きさせていただきますので、会が終了しましたらお声がけいただければと思います。長くなりましてすみません。事務局からでした。

**【司会（山縣）】** ありがとうございます。今日、菅原定志先生に早速会員になっていただきましてありがとうございました。そうですね。あと、会費の納入を忘れている方、実は私もですので、この機会にきちっと納めるものは納めて、よろしく願いいたします。

それでは、少しの時間なのですが、フリーコーナーということで、この機会に何か皆さんにぜひ聞いていただきたいということがありましたらよろしく願いいたします。

**【黒澤】** 「がんばろう！石巻」の看板が入り口にあったと思うのですが、あれは初代の看板で、今まで東北歴史博物館に保管していただいていたので、今日撤去してから初めてこちらに展示しているものです。また、これが終わったら歴博に戻していきますが、来年度以降、これを活用した伝承のあり方を模索していきたいと考えております。どうぞ帰りにちょっと見ていただければと思います。よろしく願いいたします。

**【司会（山縣）】** ありがとうございます。他にございませんか。いい機会ですので、3.11メモリアルネットワークならではのこのコーナー（笑）、うちは野蒜まちづくり協議会も県の補助金を活用させていただいて、今年初めて震災伝承フォーラムを吉田さんの隣の島の支援班の方の利用させていただいております。どうぞ、丹野さん。

**【丹野祐子】** お世話になっております。閑上の記憶の丹野です。せっかくですので、私たち閑上の記憶では、定期的ではないのですが、できるときにはぜひかさ上げをした景色の変わった閑上を歩こうという閑上ウォークという時間を設けさせていただいております。来月12月は12月14日1時から「かさ上げをした閑上を一緒に歩いてみませんか」という企画をしております。風が吹いてすごく寒いので、がっちり着込んでいただいて、ぜひ閑上の風を体験していただければと思います。今日の3時に閑上から仙台に向かう荒浜小学校への新しい道路が開通します。台風の影響で1カ月遅れました。ですから、そっちまでちょっと足を伸ばせたらうれしいななどと思いつつ、少し仙台の縄張りを広げていきたいと思っておりますので、ぜひよかったですら寒い中経験しにいらしてください。お待ちしております。

【司会（山縣）】 丹野さん、ありがとうございます。12月14日土曜日1時からということですね。ぜひお運びいただけたらと思います。ありがとうございます。他にいらっしゃいませんか。

それでは、ないようですので、アンケートをご記入いただきまして、会員も募集中という、会費も納入ということで、以上、3点で締めさせていただきます。本日はお寒い中お運びいただきまして誠にありがとうございました（拍手）。



シンポジウムの特別展示：初代 がんばろう！石巻看板（実物）